

# エンカウンター（ENCOUNTER）

第 109 号

平成 23 年 5 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

<http://encounter.agape.gr.jp/>

相沢良一

「黒潮の神学 下巻」(黒潮社)より(12)

キリストの日を目ざして

私たちが自力によってはいかんともし難い「悪しき日」に、即ち「死」に備えるために、わたしたちは他力、すなわち、イエス・キリストを信じる信仰を与えられたのであります。ヨハネ福音書の中に

「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」(11の25)

との主イエス・キリストのことばが記されています。

これは、ヨハネ福音書の著者が「主イエス・キリストはよみがえりであり、命である。主イエス・キリストを信じる者はたとえ死んでも生きる。また生きていて主イエス・キリストを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」と、同時代の人々に向かって訴えた伝道説教と申したらよろしいと思うのであります。

わたしが死を自覚したのは、多分 13 歳か 14 歳の頃と思います。そのころは既に、日曜学校（今の教会学校）に通っており、たくさんの聖書の言葉を心の中に蓄わえていたのでした。

ある日のこと、日曜学校で聞いた聖書の話によって触発されたの

でしたが、死んだらいったいどうなるのかとの思いに捉えられた時、子供心にも死の恐怖と不安に襲われたのでした。暗い気持ちで幾日かを過ごした後、私は初めてとあってよいほどの自覚的な祈りに導かれたのでした。祈っている内に、わたしに示されたみ言葉が

「我は復活(よみがえり)なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。

凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか」

でした。当時は文語体でした。わたしの心の中に、このみことばが示されたとき、わたしは「イエスさま、信じます」と祈りの中で答えたのでした。まさに暗雲一掃、爾来このみことばに支えられて今日に至ったのであります。

さいきん、必要があって読み直したオスカー・クルマンの『キリストと時』という書物の最後の文章は、わたしの子供の時の信仰経験と軌を一にいたしておったのでした。

「新約における復活の希望のすべては、過去の事実、即ち、かの救済の線を中心たる事実を信ずる信仰の基礎の上に立っている。それは、使徒たちによって証しされたキリストの復活という事実である。更にかの希望は、この事実の上に立脚する。それは、甦り給いし彼を信ずるこの人達の内に、聖霊の復活の力がすでに活動しており、世の終りまで失われることなく宿り続けるという事実である。

世の終り、ここに救済史はまた個々の信徒についても、未来独特の完成を見るであろう。その時

「もしキリストを死人の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリスト・イエスを死人の中からよみがえらせたかたは、あなたがたの内に宿っている御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも、生かして下さるであろう」(ロマ書 8 の 11)。

この信仰に立つ時「死」は決して「悪しき日」ではなくして、主イエス・キリストの救いの出来事の輝やかなしい、まさに「キリストの日」とよばれるべき日と変えられるのであります。 (94・9)

## ベテスダの池のほとりにて

「エルサレムにある羊の門のそばに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があった。そこには5つの廊があった。その廊の中には、病人、足の不自由な人、やせ衰えた人などが、大ぜいからだを横たえていた。〔彼らは水が動くのを待っていたのである。それは、時々、主の御使いがこの池に降りてきて水を動かすことがあるが、水が動いた時まっ先にはいる者は、どんな病気にかかっているか、いやされたからである。〕

さてそこに38年のあいだ、病気に悩んでいる人があった。イエスはその人が横になっているのを見、また長い間わずらっていたのを知って、その人に「なおりたいのか」と言われた。この病人はイエスに答えた、「主よ、水が動くときに、わたしを水の中に入れてくれる人がいません。私が入りかけると、ほかの人が先に降りて行くのです。」イエスは彼に言われた、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」。すると、この人はすぐにいやされ、床を取りあげ歩いて行った。(ヨハネ福音書第5章2 - 9節)

じつはこのような「いやし」の奇跡こそ、主イエス・キリストにある罪のゆるしの「しるし」であったのであります。この関連において、マタイ福音書第9章を引用いたしておきます。...

この中風のものが、主イエスの言葉により「起き上がり、家に帰っていった」という「いやし」の奇跡こそ、マタイ福音書における「罪のゆるし」の「しるし」であったのであります。...

しかし

「人の子がきたのも仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」(マルコ10の45)との主イエスのことばの中に、主イエスのご生涯が凝縮されておったのであります。この地上を歩まれた主イエスの、病者をいやされた治癒の「奇跡」こそ「多くの人のあがないとして」ご自分の命を与えられた十字架の出来事の「しるし」に、ほかならなかったのであります。...

(97・5)

## キリスト讃歌

「そこで、あなたがたに、キリストによる勧め、愛の励まし、御霊の交わり、熱愛とあわれみとが、いくらかでもあるなら、どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって、わたしの喜びを満たしてほしい。何事も党派心や虚栄からするのでなく、へりくだった心をもって互いに人を自分よりすぐれた者としなさい。おのおの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。キリスト・イエスにあっていただいている同じ思いを、あなたがたの間でも互いに生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである」(ピリピ書第2章1-11節)

使徒パウロは、このピリピ書において

「わたしにとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である」  
(1の2)

と述べ、さらにロマ書においては

「わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。だから、生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のものなのである。」  
(13の8)

と、主イエス・キリストに対する忠節の念を、このように告白したのである。...

「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に坐し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである。だれが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか、患難か、苦悩か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か。「わたしたちはあなたの為に終日、死に定められており、ほ

ふられる羊のように見られている」と書いてあるとおりである。しかし、わたしたちを愛して下さったかたによって、わたしたちは、これらすべての事において、勝ち得て余りがある。わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のもも将来のもも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主イエス・キリストにおける神の愛から、私たちを引き離すことは出来ないのである」(ロマ書 8 の 31 - 39)

まさに使徒パウロにおける「キリスト論のマグナカルタ(大憲章)と  
言うべき個所である。

われわれ教会が「勤めて怠らず、心を熱くし、主に仕え」(ロマ書 12 の 11)「主に対する信仰を揺るがない心で持ちつづける」(使徒行伝 11 の 23)ことにより、必ずや「イエスの御名によって、天上のもの、地上のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を「神に帰する時」の到来を、我らは信じて止まないのである。マタイ福音書は

「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(28  
の 20)

との言葉で終わる。

つい最近、いただいた友人牧師の手紙の中に「イエス様が居るからいつも大丈夫、これが我らのグッドバイ」とあった。これぞまさしくわが『黒潮の神学』を一言に評して余りがあったのである。このように『黒潮の神学』とは、「大丈夫の神学」でもあったのである。

まさに『終末論』とは、「主が共にいてくださるから大丈夫」との信仰の叙述以外のなにものでもあり得なかったのである。

(99・10)

完

## 跋に代えて（要約）

わが『黒潮の神学』を叙述するに際し、座右においた 2 冊の書物のうち、1 冊は高倉徳太郎『福音的基督教』であり、今 1 冊は桑田秀延先生の『基督教神学概論』であった。

筆者が日本神学校に入学したときの校長は、村田四郎先生で、卒業間際に桑田先生が校長になられた。筆者にとっては、村田先生と言えば桑田先生、桑田先生と言えば村田先生であった。

「桑田秀延全集」第 5 巻『神学と共に五十年』の中で、先生は「私の神学的立場」と題し、次のように述べておられる。

『私の神学は、一言にしていえば、保守的というか、何ら新しさのないもので、キリスト信仰、福音信仰の上に立つ神学である。イエス・キリストにおいて与えられた福音は神の究極的な啓示の真理であり、人間の罪の救いのための恵みのわざであるとの信仰を基本としている。これは独自にして究極的な真理また救いであり、神がこの世界の中へおくり給うた救主イエスの啓示を、救いのわざによって人類への恵みとして与えられた。

これを証言しているのが聖書であり、この聖書の証言に基づいて、歴史の中でキリストを信じ告白しているのが教会である。神学とは、こうした聖書の証言と教会の告白を重視し、その基礎の上に立っている学問である。」これが桑田神学であり、筆者などもこのような神学によって養われ、今日に至った次第である。

かくて、わが『黒潮の神学』は何よりも「伝道の神学」であったのである。伝道に、宣教に役立たない神学は、「やかましい鐘やさわがしい鑊鉢（にようはち）と同じである。」（第 1 コリント 13 の 1）と言わざるを得ないのである。...

第 2 に『黒潮の神学』は「十字架の神学」をその中核とする。使徒パウロは

「十字架の言（ことば）は、滅び行く者には愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには、神の力である」（第 1 コリント 1 の 18）

と述べているが「十字架の神学」は、この1節に尽きる。...

わが大島伝道55年の結論は、主イエス・キリストの恵みが及んでいない人は、ひとりもあり得ないという喜びであった。これは『黒潮の神学』の第3の「同船の者の神学」であり、この実験の舞台がじつに、わが伊豆の大島であったのである。...

第4に『黒潮の神学』は「大丈夫の神学」である。お互いに、信仰的に學術優等、品行方正、出席精勤であるから、大丈夫なのではないのである。...「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ福音書28の20)このように主が共に居って下さるからだいじょうぶであったのである。...

最後に『黒潮の神学』を敢えて「信徒の神学」と称したのは、本書はわけても信徒の方々を対象にさせていただいたからにほかならなかったからである。

わが『黒潮の神学』の内容を「伝道論」「聖書論」「キリスト論」「使徒パウロ覚書」「教会論」「聖化論」「終末論」の7項目に分け、その7項目を構成している内容の資料は、いずれも「黒潮」より選択したものである。したがって重複した個所も少なくはなかった。

わが「黒潮」が第1号より第430号に到達するまでに、じつに50年が経過をした。この50年にわたり「黒潮」に秃筆を呵しつづけてきたさまざまな文章を逐一検索、それぞれにあてはめ、このような一書が誕生したのである。

本書をひもといて下さる読者が、あのエマオ途上のふたりの弟子の如く「我らの心、内に燃えしならずや」(ルカ福音書24の13-33参照)と、みことばの力にふれていただけることが、わが執筆中の絶えざる祈りでもあったのである。

「黒潮」が百号に達したさい、当時、東京基督伝道館の牧師をしておられた加藤正義先生より「黒潮よ、どよめきわたれ、新しき時代をここに呼びさますために」との祝い歌を贈っていただいた。わが日本の教会のさらなる活性化のため、「『黒潮の神学』よ、どよめきわたれ」かし。

〔補遺〕

### 慰めの根拠

「ほむべきかな、私たちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難にいる時でも私たちを慰めて下さり、また、私たち自身も、神に慰めて頂くその慰めを持って、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。それは、キリストの苦難がわたしたちに満ちあふれているように、わたしたちの受ける慰めもまた、キリストによって満ちあふれているからである。わたしたちが患難に会うなら、それはあなたがたの慰めと救いのためであり、慰めを受けるなら、それはあなたがたの慰めのためであって、その慰めは、私たちが受けているのと同じ苦難に耐えさせる力となるのである。だから、あなたがたに対していただいている私たちの望みは、動くことがない。あなたがたが、わたしたちと共に苦難にあずかっているように、慰めにも共にあずかっていることを知っているからである。(コリントへの第2の手紙1の3-7) ...

昔、戦地に居りました時、届いた慰問袋の中に婦人雑誌が入ってありました。その雑誌に掲載されていた短歌が、いま、どうしても思い出せなくて残念ですけれども、大体こういう内容でした。甲問者の前では、息子はお国のためにりっぱにお役に立ちましたと毅然として涙一つこぼさない。ところがみんなが帰ったあとで、さぞお前寒いだらうと言って、炬燵の中に遺骨を入れて、母親はさめざめと泣いた、といううたでした。文字どおり心を抑えつける。それが私達がこれまでに教えられてきたやはり一つの悲しみとか苦しみに対処するところのあり方ではないかと思うのです。...

人間の深い悲しみ、嘆き苦しみの中で、果たしてどういう慰めが私達の本当の慰めになるのでしょうか。...

ルカ福音書第15章は「迷子の羊」の物語であります。迷子の一匹



の羊のために、よい羊飼いは迷わない 99 匹の羊は野に置いて、一匹のこの迷える羊を探し求めるのです。羊の方が羊飼いを見つけるのではなくて、羊飼いが、この一匹をたずね求め、ついに見つけ出した時、その羊を肩に背負い、喜んで家に帰って祝宴を設けたというのが、このルカ福音書 15 章の物語であったのです。主イエス・キリストの出来事というのは、まさしくこのことを意味しているのです。...

「神はそのひとり子をたまわったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」わたしたちが神から遠く離れて迷子のような迷える羊であった時に、神はその一人子、御子イエス・キリストをわたしたちの所につかわして下さったのです。...

そもそもキリスト教の本質とは、優れたカリスマを持ったような指導者が出て、祈ったらば病気が治りましたとかというようなことではないのです。...端的にいうならばイエス・キリストとその十字架、じつは、これがキリスト教のキリスト教たる所以なのです。

病気が直るとか、お金が儲かるとか、地位や名誉が与えられるというようなことは、申すまでもなく、これはキリスト教独自の者ではないのです。そうではなくして、人間の中に厳然として巣喰うところの、人間を神から遠く引き離している恐るべき罪がいかにして解決されるのか、罪の赦しはどこにあるのか。それは神のみ子イエス・キリストが十字架におつきになり、わたしたちの罪の身代わりとなって下さった、これが新約聖書の中心の使信なのであります。ところが、そういう話を聞いてもわたしたちはあまり感動はしないのです。...

わたしは今から 35 年前になると思いますけれども 2 番目の子供を亡くしました。ロマ書 12 章 11 節の「勤めて怠らず、心を熱くし、主に仕え」から、これは私が大島に赴任をする時に与えられたみことばですが、この「勤めて怠らず」から、勤(つとむ)という名前をつけました。ところが、この子はわれわれ親の不注意で自家中毒に

かかり、生まれてわずか2カ月で天に召されました。...

(勤の亡くなるなった日の)朝5時、東京船が岡田の港に入ってきます。船の汽笛が鳴るのを合図に、わたしは病院を出ました。教会学校と礼拝のご用をするために、また2里の山道を戻ったのです。1里ほど歩きますと峠の下り道で、夜がほのぼのと明けはじめ、白みはじめ、字が読めるようになりました。

わたしは新約聖書と讃美歌を風呂敷に包んで持っていましたが、その風呂敷包みを開け、聖書を取り出すと、どこを読むあてもなく、聖書を開きました。ほんとうに偶然でした。開いたところがコリント後書第1章でした。私は峠を下りながらコリント後書の第1章を1節から読み始めて3節までできました。

「讃むべきかな、われらの主イエス・キリストの父なる神、即ちもろもろの慈悲の父、すべての慰めの神」と、ここまで来た時に、なにかたまらなくなってしまうのでした。それまでは涙もこぼれませんでした。ここを読んだ時に、この「ほむべきかな」ということばが、なにか千鈞の重みを持って私の心の中にせまってきたのでした。

「ほむべきかな」「御名をほめよ」。勤を天に送ったという現実の中で、神さまはこのわたしに向かって「み名をほめよ」と仰せになっておられる。そのようななにかあるせつなさがあったのでした。けれどもわたしはその時に「主は与え、主は取りたもう、主の御名はほむべきかな」とのヨブ記の言葉を思い出し、ほんとうにそうだった。神さまはこの子を与えてくださった。そして、この子を神さまは取り去って下さったのだ、と思った時に感極まって涙があふれてきて、その続きを読むことができませんでした。

私は聖書を風呂敷にしまって、一里の峠の道を元町まで下りながら、この「讃むべきかな、われらの主イエス・キリストの父なる神、すなわちもろもろの慈悲の父、すべての慰めの神」という言葉を、何十回となく、くり返ししながら教会に戻りました。

その朝の礼拝は、昨夜、準備していた説教はやめ、「慰めの神」と

いう題で、この朝の恵みを証しさせていただいたのでした。私はこの朝ぐらい、主なる神がわたしの傍におられ、このわたしをみそばに招いておってくださったという信仰経験をしたときにはありませんでした。このパラカレオー(慰め)(パラ そば、かたわら カレオー わたしが招く、神さまが傍にいて下さる)が名詞になったのがパラクレイトスで、前は慰め主、今は助け主と訳されております。このパラクレイトスが聖霊なる神ご自身であったのでした。...

みなさん、わたしたちの慰めのよりどころは何でしょうか。慰めとはいかなる現実の中にあっても、人間のあらゆる状態を超えて、上より与えられる有効適切な助けだとも言われているのであります。人間の状態とは何でしょうか。愛するわが子が生き埋めになって、夜もすがら泣き明かしている状態ではないでしょうか。

しかし、そのようなあらゆる人間の状態を超えて、主なる神がわたしたちに与えて下さる慰め、それはこのような現実の中にあっとなおかつ生きる力、来世に対する確信と望みを与えるところのこの力、これが聖書の教えているところの慰めなのです。わたしたちはこのような慰めをイエス・キリストの十字架の出来事とおして、お互い豊かに与えられているのです。

「神はいかなる患難の中にいるときでもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。」

わたしたちは自分だけが慰められて、ああよかったとか、力を与えられたとか、あるいは希望をもつことができるようになった、涙をぬぐわれたというそのような自己満足だけではなくて、わたしたち自身も神に慰めていただくその慰めをもって、同じ苦しみの中にある人々を慰めることができるようにして下さる。ここからして、わたしたちの新しい人間が生まれてくるのです。

自分が慰められたその慰めをもって、同じ苦しみの中に、悲しみの中にある人々を慰めなければならない、そのような人々を慰める

ことができるようにされるために、わたしたちは苦しみに出会うのではないのでしょうか。わたしはこれを同情と言ったらよいと思います。同情という言葉は、これは心を一つにするという意味であります。同じ思いになるためには、同じ経験をしなければならないと思うのです。

わたしは子供をふたり亡くしましたので、お子さんを亡くされた方の気持ちがよく分かるし、お悔やみに行っても話しがよくできます。しかし、わたしはこれといった病気をいたしませんので、どうも病気の方々に対して同情が乏しいのですね。やはり自分が苦しい病床生活を送り、眠れない夜な夜な枕を涙でぬらすような経験をしなければ、やはり病者に対する思いやりは乏しいのではないかと思われてなりません。いずれにしても、わたしは人間にとって一番大事なものは、思いやりの心、同情であると思うのです。...

たとい数学が出来なくっても、わたしはそう別に生きる上に困難ではないと思うのです。それよりももっともっと、今の子供に教えてほしいことがあります。それは思いやりの心であります。相手の立場に立って、弱い者をほんとうに自分のことのように考えてゆく、また、人の迷惑にならないように生きてゆく。わたしはこのことが、この教育ができるならば、日本の国は変わってゆくと思うのです。

頭のよい者はどんどん勉強すればいいのです。できないものは何も難しい英語や数学で苦しまなくたっていいのではないか。ローマ字が読めるくらいでもいいでしょうし、十万単位の計算ができれば、それでも差し支えはないと思うのです。ほんとうにそう思うんです。それよりももっともっと大事な教育は、他者に対する思いやりの心の涵養です。この思いやりの心こそキリストの心であると思います。...

キリストイエスは神のかたちであられたが、わたしたちの罪を赦してくださるために、わたしたちと同じ立場にまでくだられ、最後は十字架の死を遂げられたのであります。中世紀のアンセルムスは「我々が神の子となるために、神の御子が人になられた」と申しま

した。そうなのです。神のみ子がわたしたちの罪を赦すために、このわたしと同じ立場に立ってくださったのであります。

これがインカーネーション、受肉の真理でありました。まさしく

「言(ことば)は肉体となり、わたしたちの内に宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた」(ヨハネ1の14)

のであります。わたしたち人間の罪をゆるしてくださるために、神の言(ことば)が主イエス・キリストにおいて受肉をしたのであります。まことに「おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜った。」ここからして、主イエス・キリストのみ名があがめられたのであります。

優しさというのは、これは人偏に憂という字です。憂いを知った人がほんとうにやさしい人だと言われております。単なる苦しみ、単なる憂いは、それだけではマイナスであります。苦難はわたしたちを駄目にする恐ろしい力を秘めております。

けれどもわたしたちの悲しみが、わたしたちの苦しみが、わたしたちの憂いが、わたしたちの主なるイエス・キリストの十字架の出来事に結びあわされるところに、マイナスがプラスに変えられ、そして優しい人間を創りあげてゆくのではないのでしょうか。これが信仰の働きなのであります。

ハイデルベルク信仰問答の冒頭に「生きている時も死ぬ時もあなたの唯一の慰めは何か」との問いに対し、「わたしが生きている時も死ぬときも、わたしの身も魂もわたしのものではなく、わたしの真実なる救い主イエス・キリストのものである」とあります。

生きる時も死ぬる時も、わたしたちの唯一の慰めの根拠は何か。それはこのわたしが救い主イエス・キリストのものにされているということ以外のなにものでもなかったのであります。

(1982年(昭和57年)1月30日千葉県八千代台教会における「なぐさめの根拠」と題する説教、『八千代台教会特別集会説教集』所収)